

山の上の生活（その2）

日本原子力研究所・理化学研究所
大型放射光施設計画推進共同チーム
加速器系グループ 田中 均

4. 南光町のひまわり

今年も8月12日の土曜日、晴天のもと、南光町のひまわり祭りが開催された。祭りといっても、ひまわり畑の脇に、模擬店が少しでいるだけのささやかなものである。この日、南光町の若あゆランドで、たまたまテニスをする事になっていた私は、偶然、この祭りに遭遇した9時からテニスをするという約束でコートに来たものの、9時半を回っても誰も来ない。朝食を済ませた後、退屈なので、アップのために野球場の周りをジョギングすることにした。球場のバックネット裏は、少し小高い丘になっているのだが、その頂上にさしかかった時、緑の水田の真ん中に黄色い絨毯が広がっているのに気がついた。面白そうなのでそばまで行ってみると、30m×200m程の畑一面にひまわりが咲いている。梅雨時に雨が多かったせいで、今年は例年よりやや花の密度が薄いという話だが、これだけの規模で咲き乱れているひまわりの姿は壮観で、一見の価値は十分にあった。

ひまわりには、夏のイメージがある。形というよりはその色合いが、強い夏の陽射しに良くマッチするからであろう。確かに、夏の鮮烈な陽射しと青い空、白い雲には、淡い色より濃い色の方が映える。それは、なにも人間の感覚に限ったことではないらしい。鳥や昆虫達の目を引くため、南国の植物には、色鮮やかなものが多いと聞いたことがある。自然とは、実にうまくできているものだ。ひまわりの濃厚な黄色はまさに夏に適した色なのである。

昼近くになると、訪れる人の数も急速に増え、観光バスもやってくるようになった。テニスコー

トは、駐車場とひまわり畑の間にあり、脇の道を多くの人が行き来して行く。中には、私たちのプレーを見物する人達まで現れた。臨時に置かれたスピーカーから、「南光音頭」（南光町を賛美した内容の歌）まで流れだしては、到底、



写真1 南光町のひまわり畑

写真は9月に咲いた遅咲きのひまわりで、お祭りの時は、写真左側の畑に広範囲に咲いていた。



写真2 若あゆランド。テニスコートと野球場

テニスなど落ち着いてできるわけがない。祭りには、やはり盆踊りの方が似合うようである。このような不思議な雰囲気の中で、テニスをする機会は滅多にないので、一生記憶に残るに違いない。

テニスを終えた後で、模擬店をのぞいてみた。そこでは、地元で採れた新鮮な野菜やひまわりから取れる油などが売られていた。野菜は、スイカを除き、一袋100円足らずとすごく安い。純朴そうなおばちゃん達に「おいしいよ」と勧められ、私は、枝豆（一株丸ごと）とトマトを200円で購入した。オプトハイツに戻り、早速、テニス仲間とビールのつまみに枝豆を食べてみたが、これがまた最高にうまかった。

5. 室津の魚

相生から浜国道（250号線）を東へ向かうと、道はすぐに、入り組んだ海岸線を縫うように曲がり始める。眺めは良いがカーブのきついこの道（運転者に、景色を眺める余裕はない）を、車で15分程走ると右手に、防波堤に囲まれた小さな漁港が見えてくる。室津の港である。室津の歴史は古く、奈良時代には、すでに港町として栄えていたらしい。開祖2000年とも言われる加茂神社（国の重要文化財）をはじめ、古いお寺が幾つも残っている。ここは、遊女発祥の地

としても有名で、浄運寺を訪ねれば、遊女友君（木曾義仲の第三夫人と言われている人）の墓をお参りすることもできる。

室津は、また、生きの良い魚を、安く買えることでも有名だ。オプトハイツの住人達も、ドライブがてら、ときどき魚を買いに行くようである。例の、タヌキにあげた「しゃこ」も、ここで買ったものらしい。ただし、量が多いので、単身者や独身者は、買うときに注意を要する。下手をすると数日間、同じものを食べる羽目になるからだ。

この室津の漁港を見おろす高台に、旅館木村屋がある。ここでは、宿泊しない人でも、活魚料理を食べることができる。これが非常に美味しく、値段も良心的である。東京の半額ぐらいと考えればよいだろう。訪ねて来た両親に、地元の美味しい魚を食べてもらいたいと思い、どの店が良いか、考えを巡らしたことがある。その時、木村屋の看板が浜国道沿いに出ていたことを思い出した。「室津であればきつとうまいに違いない」そう思って、両親を連れて行ったのが最初である。初めは、立派な店構えに尻込みしたが、値段を聞いてまたまた驚いた。予想に反して、安かったからである。以後、色々な人をここへ連れて来たが、皆、料理が美味しいと言ってくれるので鼻が高い。料理も美味しい



写真3 加茂神社



写真4 室津港

が、実は、ここの御主人が結構面白い人なのである。彼を良く知るようになったのは、2回目に訪れた時の事件がきっかけであった。勘定を支払う段になって、帳場脇に置いてある水のボトルに気がついた。聞いてみると、ここの温泉の水らしい。かなり効果のある温泉という所までは、私達も黙って聞いていた。しかし、「ボトルのそばにタバコを近づけるとタバコが美味しくなる」とか「この水を入れたペットボトルで肩をたたくと肩こりが治る」という話になり、私とSSさんは、「それは、非科学的である」とクレームをつけた。普通の水との比較実験を含め、30分程の大激論となったが、御主人は、最後まで私達の主張に納得しなかった。どこかの偉い先生に、お墨付きを頂いているらしい。こっちも癪なので、実験をするという名目で、数百円で売っているボトルを4本頂戴した。もちろん、実験などしなかったことは言うまでもない。美味しい水なので、ウイスキーを割るのに使ってしまった。それ以降、彼は、私に親しみ(?)を持ってくれたようである。私のことを「テクノの上祐さん」と呼ぶようになり、行く度に、色々な迷言を披露してくれるようになった。つい最近、母親を木村屋に連れて行った時のことである。

私：「今、美味しいのは何ですかねー」

主人：「ハモがいいよ。ハモすき（たぶんハモをスープで湯がいて食べるものであろう）にすれば最高だ。あんたには、こんな方程式考えつかんだろう。」

御主人のお話に反発した訳ではないが、ハモすきは高いので、結局、別のものを注文することにした。

6. ひぐらし

今年の夏は、大変な猛暑だ。しかし、蝉達は、夏バテをしている気配はなく、元気に大きな声で、「ジージー」と鳴き狂っている。夕方になると、新都市では、ひぐらしが鳴き始める。東京にいる頃、ひぐらしの鳴き声は、避暑地のト

レードマークであった。しかし、ここでは、日常的なサウンドである。ひぐらしの鳴き声は、他の蝉とは違い、どこか涼しげに聞こえるから不思議だ。やはり、避暑地のイメージと重なるからだろうか？

最近、ひぐらしについて、おもしろいことに気がついた。夜遅くまで、部屋でテレビを見ていた時のことである。ひぐらしが、真夜中にもかかわらず、突如、鳴き始めた。また、その声のとてつもなく大きいのだ。まるで、耳元で蝉が鳴いているかのようなのである。このような現象が何回か続いたが、原因は良く分らなかった。就寝のために電気を消すと、いつのまにか蝉の声が消えているようで、寝不足になることはなかった。この話をオプトハイッツに住んでいるSHさんに話したところ、彼も同じような経験があるという。SHさんの説では、ひぐらしは、部屋の明かりで昼間だと錯覚するらしく、部屋の方に飛んできて、そこで鳴き始めるのだそうだ。このため、電気を消せば、鳴き止むか、他の明るい所へ飛んで行ってしまおうそうである。

この話を聞いた後は、カーテンを引いて、明かりが外に出ないように注意している。真夜中の蝉時雨は、騒音以外のなにものでもないし、近所迷惑でもある。しかし、それ以上に、私の部屋の明かりで、ひぐらしの短い一生を狂わすのは、なんだか申し訳ない気がしたからである。ひぐらしは、地上でわずか一週間の短い命だ。一時間でも貴重な時間であろう。もしかしたら、ひぐらしは「あんまり夜更かしをするんじゃない」と、私に言いたかったのかもしれない。太陽の運行に合わせた生活は、人間本来のものだし、エネルギー消費の観点からも良いはずだ。「これからは、極力、朝型の生活パターンにしよう」と決意はしてみたものの、3日坊主に終わる可能性は高そうだ。

(続く)